

マリアナ、レイテ、沖縄の三つの海戦に 参加して思う60余年（前編）



池田 武邦（元巡洋艦「矢矧」分隊長）

本稿は、平成20年11月27日に水交会で行われた第402回定例講演会での標題の講話内容を、講師の校閲を得て前後2回に分けて掲載するものである。（文責：編集部）

◎はじめに

只今ご紹介に預かりました池田でございます。本日、この場でお話しすることになりましたが、実は私は、今から30年前にもこの場所で講師としてお話しすることがあります。その時にお集まり頂いた皆様の中に元軍艦矢矧の艦長をしておられた吉村真武大佐（兵45期）が聴講に来ておられたことが非常に強く印象に残っています。それはちょうど私が霞が関ビルや京王プラザホテルの設計に携わっていた時で「超高層建築」というテーマでお話しました。その頃私は47〜8歳、矢矧の艦長吉村さんは74〜5でした。他にも大勢おられたのですが、話していると私の眼中に吉村さんしかなくて、吉村さんの風貌がそのまま今もよく思い出されます。



吉村さんが矢矧の艦長をしておられたのは、45〜6歳ごろだったと思います。その頃は19歳から21歳まで矢矧に係っており、私どもが兵学校を卒業したのは昭和18年の9月でした

が、ちょうどガダルカナルが陥落して、それまで優勢だった日本が、大きく守勢にまわるその時期でした。しかし連合艦隊は殆ど健在。ミッドウェイで空母がやられましたけれど、まだ日本の帝国海軍は戦艦武蔵、大和以下殆ど健在な時期でした。

私が兵学校に入ったのが開戦前の昭和15年ですから、帝国海軍は世界最強の実力を誇っていました。また私が卒業した18年でも武蔵、大和以下殆ど健在だったので、その海軍がわずかに数年後に完全に壊滅して消滅する

◎巡洋艦「矢矧」について

というようなことは想像もできませんでした。私が卒業した時は、矢矧が佐世保で艤装中で、卒業と同時に私のクラスメート5名が艤装員としての辞令を受けました。

佐世保に着任しても、矢矧はまだ工事中でしたので、私どもは佐世保の水交社に泊まり、毎日ドッグ（現在の佐世保重工業）に通ったものでした。

ようやく完成ということで艦（ふね）に乗ったのですが、その矢矧は開戦直前の昭和16年11月に佐世保海軍工廠で起工され、翌17年10月に進水したのですが、この艦の建造は高度の秘密とされ、進水式の時にも134号艦という番号で呼ばれて軍艦矢矧という名前はいつさい伏せられていました。わずかに進水式で、関係者に贈られる杯に矢の絵とそれから萩の花をあしらったデザインがしてありました。それで、矢矧という名前は全く出ていないのですが、矢と萩のデザ

インで、これは矢矧かなと・・・、これほどに秘密のうちに建造され、沖繩特攻で最期を迎え沈没して私が「冬月」に助けられて佐世保に帰って来た時も、負け戦なものですから沈没したことも全く秘密なのです。

そのときは多くの負傷者が、私と同じように「冬月」にも助けられたのですが、沖繩への途中で救助されてから佐世保へ帰る、わずか20時間位の間に大勢の方が息を引きとって戦死されました。この方々を陸上に運ぶ際にも、お棺に入れて運ぶと目立つものですから、釘を保管する樽のような釘箱があるんですが、その釘箱に御遺体を無理やり屈める格好にして詰め込んで、あたかも物資を運ぶような形で上陸させました。このように全く秘密のうちに建造されて、秘密のうちに葬られておりますので、一般の方には軍艦矢矧という名前は全くなじみのないものでした。

あれだけマリアナ、レイテ、沖繩の海戦で活躍した軍艦矢矧ですが、その名前が一般に知ら

れるのは戦後しばらくたって、海軍に興味ある方々が、戦史を調べるようになってからです。

矢矧というのは非常に優秀な軍艦で、私が初めて航海士として取り組んだ公試運転では、佐世保から関門海峡を抜けて周防灘で諸々の試験を行いました。その時に今でも非常によく憶えているのは、最大戦速で走って37・5ノット出るので、37・5ノットで舵を一杯に取ると艦がグーッと、本当に30度位傾い

て、とても立っていられず近くの手すりに掴まるのですが、そういう格好で面舵一杯、取舵一杯を繰り返しても、非常に操縦性能が良く、新鋭艦というにふさわしいと皆が誇らしく思いました。非常に運動性能がいいそのかわり、できるだけ軽くしてありますから、防御が極めて薄くて、満載で8、500トン位になるのですが、外板は薄い鉄板みたいなものですから、台風にも何回か会いましたけれども、大きな波にやられるとウォーターハンマーの力で、もう艦がひしゃげるんじゃないかと思うようなすごい音がします。そして、事実グッと波の力が加わると閉めてあった扉が開ける時に歪んでいるという、そのくらい非常に軽くて薄い、防御を犠牲にしてスピードと兵装に重点を置いた艦でした。

私が経験した3つの海戦でも矢矧の戦闘能力は本当に素晴らしいなと感じました。最後は魚雷を7本、直撃爆弾11発を食らって沈められましたけれど、沈む

時も戦闘開始から2時間以上頑張つて、沈みながらも大砲を最後まで撃ち続けたというくらい訓練と応急処置が行き届いておりました。応急処置の一例ですが、沖繩出撃の時は、もはや沈むことを前提に準備を致しました。出撃前に2代目の原艦長が甲板士官に命じて、艦内に積んである応急用の大量の角材（戦闘被害で生じた外弦の穴をふさぐ目的で搭載している。）を全部後甲板に並べてスパニア

ンで結わえさせました。艦が沈んだら、その近くに浮いて泳いでいる人が掴まれるように準備した訳です。出撃の前に、艦が沈むことを前提にそこまで準備をして最後の最後まで頑張った艦です。それにもかかわらず、全く名前が世の中に知られていない・・・、戦艦大和は非常に有名ですけど、大和以上に活躍したと私は思っておりますが、その誕生から最期まで全く秘められてしまった「悲劇の巡洋艦」と言ってもよいかと思えます。

その艦に私は少尉候補生から



公試中の矢矧 (昭18.12.19)

分隊長になるまで、ずっと全く
転勤なしで乗組みました。戦後
調べて見ると同じ艦に2年近く
ずっと転勤なしで少尉候補生か
ら少尉、中尉と昇任し、分隊長
になるまで同じ艦で過ごしたの
は、クラスメート625名のう
ち私1人です。それから3つの
海戦全部に出撃したのも625
名の中で私1人でした。これは
恐らく人事部で最初に矢矧に乗
せたまま次の人事発令を忘れた
のではないかと思う程です。他
の連中は、必ず何回か転勤して
いるのに私は全く転勤させてく
れなかったお陰で、3つの海戦
を体験し、そして矢矧の生涯と
共に過ごす、という非常に貴重
な体験をさせていただきました。

◎戦争体験と

戦後の価値観

戦後60何年か経ちますが、私
の人生にとって一番ウェイトが
あるのは、海軍の5年間です。
その5年間で私の戦後の人生の
殆どを決めていると思うくらい
とても重要な5年間でした。最

近は物忘れがひどくて、さっき
言われた事をすぐ忘れてしまう
のに、その5年の事は、まだ昨
日の事のように克明に憶えてお
ります。それだけインパクトが
強かったのでしょうか。

私は仕事がら色々な場所で講
演を依頼されますが、一般的な
講演で私を紹介するのに、最初
に『大正何年生まれ』、それか
らいきなり『東京大学卒業』と
なって、自分にとって一番大切
な期間である戦争中のことは全
部省略されてしまいます。私が
事前に提出する経歴にはちゃん
と書いてあっても一般では全く
その事はネグレクトして大学を
出てから、どういふことをやつ
たといふことしか紹介されませ
ん。

これは戦後の日本では、『戦
争は悪いことだから二度とやつ
てはいけない。』『日本が戦争
をやったことは思い出したくも
ないし子孫に伝えるべきではな
い。』という偏った歴史観で近
代史を封印してしまった結果だ
と思います。

私自身、戦後全く戦争の話を

公の場でしたことがないので。
本日のような講話をするのも、
本当にここ2、3年の事で、そ
れまで海軍関係者以外の方に戦
争のセの字も話していないし、
もちろん家族にも話しておりま
せん。

私は、これは非常に大きな間
違いだっただと思います。

それは何故かという、私ど
もが兵学校を卒業した時は、ク
ラスメートが625名おりました
で、そして僅か2年足らずの戦
争が終わった時には生存者29
0名です。半分以上戦死してい
るのです。それで私達は戦争が
終わった翌年、まず真っ先に生
き残った同期がなすべき事は何
かを考え、戦死者のご家族、ご
遺族をお呼びして靖国神社で慰
霊祭を行うことを計画いたしま
した。そこでご遺族に連絡をし
て全国各地から来られる方々の
ために、靖国神社周辺で宿泊場
所を確保しようとしたのですが、
どここの宿もホテルも、「元軍人
お断り」なのです。我々は決し
て自分たちが泊まるのではない、

ご遺族が泊まるのだということ
を懸命に説得して、やっと宿が
とれるという状態でした。

それから私も結婚しまして、
戦後20年近く経ち、私の子供が
小学校3年生になったところです。

たまたまウィークデイに出張が
早く終って家にいたら、息子が
学校から帰って玄関を開けるな
り、私に向かつて、「お父さん、
なんで戦争に行ったの、戦争つ
て悪いことなんでしよう、悪い
ことに何で行ったんだ！」とい
きなり質問をぶつけました。小
学校3年の息子から、いきなり
こんな言葉が飛んで来るといふ
ことは、要するに学校で、『戦
争はよくない。戦争なんかに行
く事は非常に悪いことだ。』と
いふふう教えている訳です。

ところが、相手は小学校3年
生ですから、私がいくら説明し
ても理解できず、こちらはもう
何にも言うことがないのです。
それ以来、いくら私がいかに
したことを言っても、周りが、
「今どきそんな事を言って・・・」
という感じで、絶対に私の言い
分をサポートしてくれないので

す。これが日本の戦後社会なのです。

私どもは終戦直後から、もう本当に嫌というほどこういうことを体験しました。自分が子供の頃から身に付けた価値観と戦後社会の価値観がまるで正反対ですから、自分の価値観で子供に何か言おうとしても、周囲の人々は「今どきそんなことを言ったって・・・」という反応しか示さないのです。こんなことが重なる、もうそれはそれでよいと思ひ、こちらからはもう一切言わない、という気持ちになつてしまいます。

自分が堅持している価値観と、戦後生まれの世代が築いてゆく新しい価値観が大きく違つたとしても、それはそれで何かいいこともあるのだろうと気持ちを切り替え、若い世代への期待も生まれて、それからは一切関与しませんでした。

ところが最近になって、色々な角度から日本の社会現象を見ていると余りにもおかしい、これが日本人のあるべき姿か、と

疑問に思うことが非常に多いのです。

最近では毎日のように、政治家や各界の責任者がテレビの画面でお辞儀をしている。新聞にも頭を下げた写真がデカデカと出ている。こんな事は、私の価値観では考えられないのです。

責任者が何をもつて自分の道徳や倫理としているのか、謝ればいいと思つているのか、現状は余りにもひどい。日本がこんな姿になるというのは、私どもの世代では考えられない事なのです。

このような世を嘆く想いは皆同じと見えて、私のクラスの会報にも同様の意見が一杯出てくるのですが、私は、よくよく考えると結局これは自分達の責任だったなと思います。

爺さんや親父からずっと伝えられ、幼児の頃から自分達がどっぷりと浸かって来た日本の価値観というものを、いま改めて見直してみても、全世界に誇つていいものだと強く思います。

ところがそれを私どもはひとつも次の世代に伝承しなかった。

敗戦という大きな変節があったとは言え、これを正しく伝えなかったことが、結局次の世代の価値観がアメリカナイズされた、ふわふわしたものになり、一時的な風潮に大きく流されてしまふという結果を招いてしまったのだと思います。

「戦争は悪いことなのになぜ行つたんだ！」と私に詰め寄つた息子も小学校の先生になって、もう50歳を過ぎました。ところが最近いろいろ話をしてみますと歴史を全然知らないのです。

日本の近代史を作つた日清戦争、日露戦争という大きな出来事も学校でちゃんと教わつていない。余りにも歴史を知らな過ぎます。息子が小学校の先生でありながら、子供たちに戦争のセの字も言つてない。ところが最近になって息子はやつと、これは大変だつた、良くなかつた、という風に思うようになったのです。

このきっかけは、私が戦後ずっと続けてきた矢矧の慰霊祭に息子を連れて行つたことです。戦後60年を経て矢矧の生存者の一

番の若手であつた私も80歳を過ぎ、もう最後になるかも知れないと思ひながら、平成18年の4月7日に私が団長となつて、矢矧が沈んだ海域で何度目かの洋上慰霊祭を行いました。その時に息子に「お前、ともかく付いて来い。」と言うと……親父が言うことだから……と嫌々ながら同行してくれたのです。

たまたま、その日は矢矧が沈んだ4月7日、あの東シナ海の風景が、昭和20年の4月7日の海とそっくりなのです。11〜2メートルの風が吹く空には、どんよりと雲が低くたれこめ、本当にあの日の風景と全く変わらぬ。陸上の風景は60年も経つと、がらりと変わつてしまひますが、海の上は全然変わっていない。大自然にとっては60年などというのは、ほんの一瞬で、そこでは何万年、何億年も同じような営みが続いている。

その営みの中で、昭和20年にここで矢矧が沈んだ時と全く同じ風景のなかに息子が立つたことで歴史の重さを彼なりにイメー

ジしてくれたのだと思います。60数年前にこの海につながる太平洋で、何万という自分の父親の世代の若者が命を落としたというのを心の底から実感したようです。それ以来息子の態度がガラリと変わって、私から話を聞いたり本を読んで勉強するようにになり、いままでそういう事に関心を持たず、自分が小学校の先生でありながら、子供達に戦争のセの字も話して来なかったことを深く反省して、一生懸命父親を理解しようと努めてくれ、ようやく心が通じるようになりました。

でもこれは例外的なケースだと思います。

このあいだ私の番組を作ってくれたディレクターも、実は息子と同世代で、彼のお父さんも戦争に行っているのですが、お父さんは全く戦争のセの字も言わないで、何年前前に亡くなられた。それでディレクター自身が私を取材しながら、自分達の世代は親父から何も聞いてこなかった、しかし何かを聞いておけばよかったという想いに至っ

たのでしよう。非常に真剣に取材してくれ、心のこもった番組に仕上げてくださいました。

これは、そのディレクター個人の感性によるところが大きいのですが、このようなことを色々体験してみると、やはり私どもは、伝えるべき事は伝えなくてはいけないのだという思いを新たにします。

我々の日本にずっと伝わっている文化とか価値観というのはその中にどっぷり浸かって生活している若いうちは良く分からないのです。若いころは大変に非合理的に見えることは沢山ありますが、いわゆる近代技術文明における合理性というのは、こうすればこうなると、結果はあーなると言う、理屈で割り切れる目先の合理であって、文化や伝統、日本の心などと言うものは、長い歴史の中での人間の生活の知恵の重なりが色々な形で実を結んだものなのです。例えば『一寸の虫にも五分の魂』という言葉があります。若いときにこの言葉を聞いても、ああ、そうか・・・としか思いま

せんが、いま80の半ばになってから、千三百年前の崇神天皇の時代の木簡にそう書いてあるという、『一寸の虫にも五分の魂』という文字を見ると、これはこれで非常に深い意味を感じます。

このように日本の文化というのは、実は若い頃には分からない。価値観が理解できないのです。したがって戦後は、「何のために命を捨てるのか、命が一番大切なだから自分の命をもっと大事にしる！」などと浅はかな言葉が出て来るのです。生き物は生まれたときから本能的に自分の命を大事にします。その本能を抑えて、自分の大切な命を国家や世のため人のために投げ出す・・・と言う行為には、実は、とても深い哲学や意味があるのに、若い時にはそれが分からない。ある程度の人生経験を

経てやつと分かるのです。

若者達が、目先の合理だけ判断することが、如何に浅薄であるのかに気付くには、「昔、頑固親父が色々と訳の分からぬことを言っていたなあ・・・」という事に思いが至り、自分も

それに近い歳になることが必要なのかも知れません。

本日はそういう事を含めて、ちよつと自分の経験を話します。

◎マリアナ沖海戦

これが矢矧です。私達は兵学校を卒業するときに航空志望とか砲術志望とか、配置の希望を書くのですが、私は「水雷戦隊志望」と書きました。矢矧は正に水雷戦隊の旗艦として造られているのです。私はこれ以上ない配置だと思つて、喜び勇んで、矢矧に乗りました。

カタパルトの近くに、零式水偵を2機積んでいます。これは索敵性能が非常にいい飛行機です。

私達72期では卒業と同時に、5人の少尉候補生が矢矧乗組みを発令され、マリアナ沖海戦（あ号作戦）には、5人とも少尉で参加しています。「あ号作戦」が終わった直後に移動があり、その内3人は、転勤して、私と、伊藤少尉の2人が矢矧に残りました。

昭和19年の「あ号作戦」では散々やられました。やられて沖繩まで逃げ帰って、それからもう1回態勢を整えたのですが、日本近海では、敵の潜水艦が一杯いて、対潜警戒ばかりで訓練になりません。加えて内地には石油がないために南方、リング泊地まで進出することになります。

戦前は、わが国の石油は大部分アメリカから輸入していたのに、そのアメリカと戦争を始めた訳ですから、一切石油が入らない。内地の備蓄はほとんど払底します。だから艦1つ動かす、例えば、戦艦大和のような大型艦は、ちよつと動いただけで、何千トンも燃料を使うわけですから大変です。それで、シンガポールの南の赤道直下にあつて色々な島や珊瑚礁に囲まれて敵の潜水艦が近寄れない、また敵機の行動圏外にあるリング泊地という南北が30哩、東西が40哩位の、訓練するのに適した場所に移動したわけです。ここはすぐ近くに油田があつて訓練するのに最適の場所なのです。した



がって、南太平洋やインド洋での1つの作戦が終るとここに引き上げてきて、部隊を再編成して訓練を繰り返す、次の作戦に備える訳です。

矢矧が竣工したのは、昭和18年の12月です。私の配置は艦橋です。艦橋は、だいたい水面から15m位で、この高さから水平線を見ると、水平線までの距離が大体15,000m位になります。

「あ号作戦」の時には、敵がどんどんマリアナの方に来るといので、リング泊地で訓練し

ていた艦隊がまずタウイタウイという前線基地まで出ます。5月の初めにタウイタウイに集結して、敵が攻めてくる状況に対応して「あ号作戦」を發動するという計画でした。この時は、小沢長官が最高司令官で栗田さんが戦艦や重巡の第一前衛部隊、空母部隊は大鳳を旗艦として、翔鶴、瑞鶴、その他の日本の主力空母群が本隊です。前衛である戦艦や巡洋艦を前の方に出して、そこに敵を誘き出している間に、後ろに配置された空母から飛行機が出て、それをやっつける。

日本の飛行機の性能が非常に良かったものだから、大体300哩位の所から攻撃が仕掛けられるのです。ところが、アメリカの飛行機は、非常に装甲が重たいものですから、こちらの弾が当たっても、なかなか落ちない代わりに航続距離が非常に短い。200哩位しか進出できない。日本は、非常に軽快で航続距離が長い、その代わり、防御が少ない、矢矧なみの飛行機なのです。

それで、アウトレンジ戦法といって、敵が届かない300哩位の所から、こっちは仕掛けて、そして200哩よりちよつと手前の場所に戦艦や重巡を置いて、そこへ誘きよせて、こっちがその間に空母を撃つというアウトレンジ戦法というのをやりました。

矢矧は、10戦隊の旗艦として、大鳳、翔鶴、瑞鶴という空母群を直衛する任務を付与され、順調に行動していたのですが、まだまだ敵の飛行機は届かない距離で潜水艦の魚雷攻撃を受けてしまいます。潜水艦にやられたのは、実は後で調べると、日本の艦隊がタウイタウイを出たあたりから、散開潜伏していた敵潜からの情報で、敵には日本艦隊の動静が或る程度分かっていたのでした。

タウイタウイの沖合に敵潜が居ることは分かっていたので、同地に所在する駆逐艦を掃討に出すのですが、逆に敵の潜水艦に駆逐艦がやられてしまうのです。6月7日に「早波」6月9日には「谷風」が撃沈されました。

た。というのも敵潜のソナーの方が日本のソナーよりも遙かに性能がいいからです。さらに日本のソナーは、艦隊で行動中は味方の雑音一杯入って、なかなか敵潜水艦の見分けがつかないのです。そういう技術の差が物凄くあって、残念ながら、日本は潜水艦に対して有利な戦いが出来ませんでした。

この作戦では、まず翔鶴が敵潜の魚雷でやられました。私も目が目の前で見たのは、魚雷でやられた翔鶴が、艦首の方が先に沈んで艦尾が上がり縦に傾斜してゆきました。そのうち乗員が皆飛行甲板に出ます。翔鶴の場合には、格納庫から飛行機を飛行甲板に揚げるエレベーターシャフトから炎が盛んに出ていました。そして、だんだん艦の傾斜が増して行くと飛行甲板上に大勢いた人が掴まる所がないから、スベリ台を滑るように、飛行甲板の上をずり落ちていくのです。で我々は何とか矢矧を接舷させようとしたのですが、すぐに接舷するのは危険な状態になり100m位離れて、もうた

だ見守るしかなかったのです。見守っていると、目の前で、ボンボン火を噴き出しているエレベーターシャフトの炎の中へ乗員の方が、まるで、もう虫けらのように落っこちて行くのです。結局その火の中に落ちるか、さもなければ海の中ですから本当に火責め水責めというのか、地獄そのものですね。

この時点では、まだ敵の飛行機は届かず空襲は全然ない、潜水艦にやられただけなので味方は健在なんですけれど、目の前で我々が一番頼りにしている空母がこういう状態です。

そして、正に火の中に生きたまんまの健全な人間がぼろぼろと落ちていく様を目の前に見て、初陣だったものですから、「あつ！これが戦争というものか」と、と思いました。戦争のセの字も知らないで出撃し最初に体験したのが、こういう状態でした。

それから間もなく、今度は大鳳が魚雷にやられます。で大鳳は、魚雷にやられてもほとんど30ノットで走って、外観は全くなんでもないので。だから、

ああさすが大鳳だと思っただけで、そのうちに大爆発を起こしてしまします。これは艦の内部で飛行機の燃料が気化してその蒸気が格納庫の中に充満していたので、それを排気しようとして

排気ファンのスイッチを入れたらしいのです。その時のスパークで、充満していたガスに火がついて爆発したのです。あつという間に巨大な大鳳が爆発を起こして沈んでしまいました。

大鳳は最新鋭の航空母艦で、その年、昭和19年の3月に竣工したばかりです。出来上がって3ヶ月

たったばかりの最新鋭中の最新鋭で、しかも南太平洋海戦で翔鶴、瑞鶴が爆弾で飛行甲板をやられたために飛行機が発艦できなくなったという戦



訓を生かして、飛行甲板に10数センチの装甲を施してありました。上空からの爆撃にはビクともしない新鋭空母に小沢長官が乗って「あ号作戦」に出撃したのです。

その大鳳が1発の爆弾も受けずに格納庫の爆発でひとまりもなく沈んでしまった。そういう現実が目の前で起つても我々は傍観するほかありませんでした。そして矢矧は、負傷したり、大火傷を負って泳いでいる人をいっぱい救助したのですが艦の中で大勢亡くなってしまうのです。自身は爆撃を受けていないのですが、これが戦争だということを、嫌と言うほど味わたのは「あ号作戦」でした。

は「あ号作戦」でした。
(いけだたけくに 兵72期)

・・・以下次号に続く